

ICAN Monthly Report ②



街頭募金の様子（愛知）

今日もみんな「イエメン！」と叫ぶ。

昨年12月20日、イエメン紛争が始まって1,000日を迎えました。この紛争で約5,000人の子どもが死傷し、現在も40万人の子どもが深刻な食糧不足、180万人の子どもが栄養不良に直面しています。「地球最大規模の人道被害」とも言われるイエメン紛争ですが、日本ではメディア掲載も稀で、多くの人々は紛争の存在すら知りません。アイキャンでは、2016年12月からのイエメン避難民に対する食糧提供や子どもの保護活動に加え、2017年1月からは、名古屋でイエメン紛争被害者への街頭募金を行っています。

1月13日、4回目となるイエメン街頭募金が行われ、40人のボランティアが集まりました。過去3年間の平均約20人と比較して、その多さが際立っています。イエメン街頭募金を始めた当初、ボランティアから「イエメンはどこにあるのかも知られていないから、イメージすることも難しい」という声が聞かれ、街の人たちからも、「今回はフィリピンじゃないの？」といった質問も多かったのですが、1月には街頭募金の最中に「イエメンね、頑張ってるね」などの言葉も聞かれるようになりました。少しずつ、イエメンについて関心を持ってくださる方が、増えてきているように思えます。この日、139人の方が募金してくださいましたが、それは、イエメンの子どもたちに平和に暮らしてほしいという意思表示でもあります。

アイキャンでは、ボランティアが中心となり、約10年もの間、名古屋で毎月街頭募金を続けてきました。学生や社会人、主婦等、いろいろな立場の方がボランティアとして集まり、参加者が多い時には、集合時間にエレベーターが混雑し、事務所がある9階まで階段で登ってくださるボランティアの方もいるほどです。毎月街頭募金を行うたびに、ボランティアと街頭募金寄付者約150名が、イエメンやジブチ、フィリピンの子どもの現状について触れ、思いを馳せる機会となっています。10年間でどれだけのボランティアと寄付者が参加して下さったか私自身正確な数字は把握していませんが、本当に多くの方にとって、自分たちの「できること」の実践する場となっているのだと痛感しています。

イエメンの厳しい現状は、依然として、多くの人に知られていません。これからも、ボランティアの皆さんとともに「イエメン！」と叫び続け、いつの日か、日本社会で、イエメンのことが普通に語られるようになることを願っています。そして、いつの日か平和なイエメンを訪れたいと思います。



ICAN 日本事務局
インターン
柴田康平（しばたこうへい）
～プロフィール～
岐阜成徳学園大学教育学部4年生。2017年6月から日本事務局にてインターン開始。

Project Site



認定NPO法人アイキャン

〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須3-5-4 矢場町パークビル9階 TEL/FAX: 052-253-7299 メール: info@ican.or.jp

ホームページ <http://www.ican.or.jp> フェイスブック <https://www.facebook.com/ICAN.NGO>

Close up

I. 危機的状況にある子どもたちと「ともに」行う活動

全6事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

①路上の子どもたち

1月19日/マニラ(フィリピン)

路上の子どもたちへの道徳教育



ドロップインセンターにおいて、「言葉」をテーマに子どもたちに道徳教育を行いました。何か言葉をかける時、自分がもし言われたら、ということ想像して相手を気遣うことができるよう、自分が今まで言わ

れたことのある嬉しかった言葉、悲しかった言葉を挙げてもらい、言われた時の気持ちを共有しました。

参加者の一人アリソン(11歳)は、「路上で大人に悪い言葉を言われた時、とても悲しかった。だから自分はこの言葉を使わないようにする。」と話しました。

②紛争の影響を受けた子どもたち

1月20日-31日/ハッジヤ(イエメン)

1,740世帯への食糧提供を実施



イエメンの中でも激しい紛争が続く北部のハッジヤ州の2つの郡において、国内避難民等1,740世帯への食糧提供を実施しました。

食糧提供に先立って、国連の指標を使い避難民たちの食糧不足の現状を調査した

ところ、平均で、週7日のうち約5日間は、満足に食べられていないという回答でした。また、飢えを凌ぐために、恥を忍んで他人の家で食べさせてもらうケースもかなり一般的であることが推察されました。今回の食糧提供を受け、状況が改善すると、喜びの声が多く聞かれました。

II. できること (ICAN) を増やす活動

全7事業の中から、今回はこちらの2つをご紹介します。

NGO 相談員事業

1月27日/愛知

NPO 活動の取り組みを知る



日本事務局にて、名古屋女子大学中学校の生徒10名に対し、アイキャンの活動やイエメン・ジブチでの事業について伝えました。「自分とは住んでいる場所も環境も違って衝撃的だった」「少しの寄付で1人が救えるのなら、私も寄付したいと思います」等の感想がありました。

また、「できること」のひとつとして、物品カウントのボランティアを実践してくれました。

MY アイキャン事業

1月13日/愛知

インターン生によるフェアトレード勉強会



世界と自分を身近に感じ、行動につながる学びを得てもらうことを目的として、インターン生による勉強会が開催され、学生・社会人の計7名が参加しました。参加者は、アイキャンのフェアトレードの商品の背景を学び、ワークショップ

を通して身近な人にフェアトレードについて伝えられるようになりました。「背景を理解したことで自分の言葉で伝えられるようになってよかった」等の感想がありました。

今月の Topic



子どもの広場活動参加

1月10日-16日/ジブチ

アブダビ大学の学生が、ジブチにあるアイキャンの子どもの広場でギターやピアノを使った音楽演奏会、ミサンガづくり、英語・仏語教室、サッカー、ドッジボール等の活動を実施しました。普段と違う活動内容や、大人数のお兄さんお姉さんと一緒にやることで子どもたちはとても楽しんでいる様子です。

今月の ICAN なる人

◎曾我さん、生徒さんにもアイキャンを知るきっかけをつくってください、ありがとうございます！

マンスリーパートナー 曾我日出男さん

「東日本大震災がきっかけでした」

インタビュー:11月17日

2011年4月のある日、アイキャンから1本の電話がかかってきました。宮城県石巻市の避難所で被災した子どもたちのメンタルケア・学童保育を行うため、子どもたちの学用品・レクリエーション物品の寄贈を行う事になり、愛知県内の学校・学習塾・予備校に、紙や鉛筆、絵具などの寄付を依頼しているので、協力願えないかという内容でした。世の中には援助団体を名乗って、単なる金集めをする人たちもいるという話を以前ニュースで聞いたような覚えがあったので、念のためインターネットで調べたところ、2010年に外務大臣表彰を受けた名古屋の団体でした。一応信用して、場所が近いので画用紙・色鉛筆・クレパス・色紙・絵具などを持って、直接事務所に行ったのがアイキャンとの出会いでした。

話を聞いてみると、とても良い活動をしていると感じ、ウチの生徒もこの事を知ったらきっと視野が広がるに違いないと思い、見学を申し込みました。ちなみにウチは美術系大学受験の予備校で、主に高校生が芸大受験で出るデッサンなどの実技を学びにきています。見学に参加した生徒たちは、知らない世界の厳しい現実には驚き、自分がとても恵まれている事に気づき、感謝の念を抱きます。そういう体験が、受験だけでなく今後の人生にも生きてくると思い、毎年続けています。そんな事を機に、少しでも困っている人の力に、又、アイキャンの力になれたらとマンスリーパートナーになりました。今後もフィリピンやイエメン、アイキャンの支援をしていきたいと思っています。

